

の條によれば、張駿の將楊宣の焉耆を討つや、其前鋒張植が「進屯鐵門、未至十餘里、熙(焉耆王)又率衆、先要之於遮留谷」と記せり。而して遮留谷なるものは、徐松が水道記にする所によれば、「今自庫爾勒北二十里至巖口、所謂遮留谷」とし、これより山路崎嶇三十里にして大石嶺を越ゆる所、海都河(徐松コンチダリアをも此名を以て呼べるにてユルヅスの谷より來れるものを云ふに)に逼りて頗る要害或は之れ鐵門關を置きし所ならんと云へり。此東方にも鐵門の名を今日に存する所あれども、晋書に見ゆるものはまさに遮留谷の北方十餘里の地に求めざる可らず。而して此道はまたこれ羅布の方面よりコンチダリアの流域を行くものにして、もとより東北吐魯番の道より焉耆を攻めたるものに非るは明かなり。コンチダリアの流域は吐魯番地方とはクルクタグ (Kuruk-tag) 等の山脉を以て相距て、前者よりすれば巴格喇赤湖の北方を過ぎて焉耆に達するに反し、後者は其南方に達し、西にめぐりて焉耆に至るものなればなり。實に魏略(魏志卷三)に中道として記する所は、玉門關より西に向ひて樓蘭に出で、更に西北に轉じて龜茲(今の庫車)に至るものにして、北道とは龜茲に於て相合するを云へり。思ふに焉耆に至るものは、コンチダリアにて北道と別れたるものなるべし。之によりて考ふれば、李柏が海頭に到りし時は、亦其時代の楊宣等の行軍路と等しく、北道によらずして、先づ羅布に至り、此地より北上して焉耆に向ひしを知るべし。而して「王使迴復羅從北虜中與嚴參事往」というものは、哈密より吐魯番に出で、焉耆に出づる所謂北道なるか、或は哈密より北蒲類 (Barkul) に出で、更に西車師後王の國なる今の烏魯木齊 (Urmchi) を經て、吐魯番より焉耆に達するものかの一ならざる可らず。蓋し隋書裴矩傳に北道として記するものは即ち後者にして、此虜の一掃せられてより後此道を開きしが、之も亦漢代既に用ゐたる所にして、魯克沁、關展の南方一帶に横はれる白龍堆の沙磧を避けて玉門に達せしこと、漢書車師後城長